

現代農村における祖先祭祀の儀礼とその変容
—茨城県阿見町における盆行事を事例として—

筑波大学人文社会科学研究所 歴史人類学専攻 李 雪

【研究目的】

本研究は盆という非日常的な時間に着目し、家と集落という2つの枠組みに分け、現代農村における祖先祭祀の構造を考察することを目的とする。

【祖先祭祀に関する先行研究】

①祭祀主体と被祭祀主体

祖先祭祀は家を永久に継続させ、家連合や村落を強化する機能がある〔柳田 1946〕〔有賀 1970〕〔竹田 1996〕。これらの機能により、祖先祭祀は「家、家連合の自立性、一貫性、恒久性の原理を貫く象徴的儀礼」と位置づけられた〔ボクホベン 2005 : 50〕。

家の永続を前提とした動向に対して、祖先祭祀が父母への愛情の延長であり、その後追慕敬愛に転換した情念に基づくものという感情的なアプローチからも考察されてきた〔穂積 1929〕〔前田 1965〕。

→都市の発展や家父長制の衰退によって制度上の家は衰退していっただけでなく、意識上の家も衰退し続けている〔鈴木 2018〕。「心的交流」が現代日本の祖先祭祀の基盤になりつつある〔ボクホベン 2005 : 51〕。

→本研究は祖先祭祀が家・集落の団結性を強化するという機能を重視しながら、感情的なアプローチから祖先祭祀の実態を考え直す。

②死者を象徴するシンボル

死や死者にまつわる感覚と祖先祭祀の変化を考察するために、位牌、遺影、仏壇と墓地というモノと空間が注目された〔上杉 2001〕〔中込 2005〕〔山田 2006 ; 2011〕〔ボクホベン 2005〕〔森 2018〕など。モノを通して、身体を失った死者が人々の記憶の中に人格を形成し共有〔山田 2006〕できる一方、死者への追慕などの感情が表出され強化されることもできる。

→本研究は祭祀者の能動性によって位牌などのモノを利用し、祭祀者の感情を表出し祖先と交流できるために、いかに仏壇と墓地を特別な空間に構築したのかを考察する。

③非日常的時間である盆

家における盆行事について、祭祀対象〔柳田 1946〕〔藤井 1988〕など及びその性格〔小野 1984〕などへの考察と祭祀場所の設置〔柳田 1946〕〔最上 1988〕など及びその移動と変遷〔喜多村 1985〕〔高谷 1985〕をはじめとし、

盆に関する時空間の研究成果が多く蓄積されていた。このような動向に対して、湯紹玲は「ムラの視点で考察されるものが少なかった。盆行事をムラ・イエ双方の視点で見直すことは課題である」と指摘した〔湯 2013 : 107〕。

日本西部における共同体の盆行事が考察されていたの（〔湯 2013 ; 2015〕〔岩野 2008〕など）に対して、関東地方にある集落における盆行事への考察が少ないというのは現状である。そのうち、盆綱という行事がある。関東地方の盆綱行事は1964年から研究され始まり、盆綱の分布上の特徴、蛇型綱と位置付けられた盆綱の機能と水神信仰との関連が注目されていた（〔藤田 1964〕〔櫻井 2012〕など）。

→湯が指摘した課題に基づき、本研究は家・集落との2つの枠組みから盆行事を考え直す。また、集落行事を考察する際、従来の盆綱に関する地域を超えた比較やその機能に注目するのではなく、盆綱の参加者及び伝承者や地元住民の感情と観念の面、すなわち盆綱に関する人からのアプローチから分析し試みる。

【研究視座】

①儀礼の移行過程

ファン・ヘネップによる儀礼の移行過程の図式に基づき、ウィクター・W・ターナーは周辺段階では「身分昇格」という地位逆転の現象が付随すると指摘した〔ヘネップ 2012〕〔ターナー 1976〕。

→本研究ではこの視座を用いて、儀礼を実施する主体（盆綱の参加者）及び関係する主体（盆綱の伝承者と指導者、過去の参加者）という2種の身分の相互転換に着目し、集落の共同行事である盆綱の儀礼実践を分析することを試みる。

②慣習と伝承

ピエール・ブルデューはハビトゥスが「心的諸傾向のシステム」で主観的なものであり、産出された過程において、過去の経験の蓄積と無意識の自発性という2つの要素の影響を受け、身体を媒介とし表出する〔ブルデュー 2007 : 82~89〕。また、平山和彦は佐藤泉と和歌森太郎の伝承論を考察し、「家族の日常的接触・交流」と「継承者が伝達者の価値観」への尊重・理解を伝承の重要な要素と指摘した〔平山 1992 : 36~46〕。

→非日常的な時間にしても、日常生活にしても、家において祖先を祭祀する仕方や伝承は祭祀者自身の観念に関わるが、身体的な動作と姿勢から祭祀者の祭祀動機や感情基礎を捉えることを試みる。

【研究課題】

以上の問題意識と視点に基づき、本研究は儀礼実践に関わる人からの視点で①家と集落にわけ、祖先祭祀の実態及びその変化を明らかにする、②祖先祭祀の伝承を考察する、という2つの課題を設置する。

【用語の定義】

『日本民俗大辞典』における「仏」と「先祖」という項目を参考とし [佐々木 2000 : 545] [中込 1999 : 956]、本論文で扱う主要用語である「新仏」、「仏」、「ホトケ」、「ご先祖様」と「祖先」を定義する。

- ・新仏：四十九日から新盆（新盆期間も含む）までの段階の死者
- ・仏：新盆が終わってから最終年忌までの段階の死者
- ・ホトケ：「新仏」と「仏」という2つの段階を合わせたの死者
- ・（特別な説明がなければ）ご先祖様＝祖先：「個性のある、固有名詞で呼ばれる」と個性のない「一つの集合体として認識される」という2種の存在を含む集合概念の死者 [中込 1999 : 956]

【調査地の有効性】

①現在、盆になって盆綱を行なっている集落がある。（資料：阿見町における盆綱実施状況）

→家・集落の盆行事の観察が可能である。

②盆綱に関する保存会がなく、盆綱の伝承者は過去の参加者である。

→関係者（伝承者と参加者以外の集落の住民）より、盆綱に対する理解と感情が深い。

→少子化を受けた影響による盆綱行事の変化の聞き取りが可能である。

③希少な風習であるため、「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選択された¹。

→盆綱に関する先行研究はほぼ進んでいない。

→盆綱行事の廃止が進んでいるため、その実態を記録し今後の参照になることが可能である。

→関東地方、北部九州の盆綱行事と接続できる。

【第1章の概要：葬制の変化と墓地景観の形成】

・葬制の変化—F家の香奠帳から

ここでF家を事例として、葬制の変遷と百カ日までの供養の変化を見ていく。土葬時代に、F家は死者が出ると、働き者²に知らせ、働き者と共に土葬を完成していた。通夜の日から3日間で宴会³を行っていた。宴会の料理は親戚や集落住民から贈られた食材で作られた。F家の交際範囲の拡大と共に、宴会の規模も大きくなった。そして、贈られた香奠は多様になり、数量も大きくなった。

¹ 「阿見町の「盆綱について」 <http://www.town.ami.lg.jp/0000001414.html> 2021年4月18日最終閲覧

² 働き者とはF家が所属する本組合（6軒の家が構成する）と葬式組合（6軒の家が構成する）に所属する12軒の家である。働き者の役割の分担については本組合にある家に死者が出ると、本組合にある男性が帳場といった金銭に関わる事務を担当し、葬式組合にある男性が蔵堀や手附などの力仕事を行う。F家の香奠帳に「働き者」と記したため、そのまま援用する。

³ 「宴会」はF氏が使った用語であり、そのまま援用する。

F家は昭和63(1988)年前後、墓地の建て直しを行った。その後、石墓を汚せたくないということでF家は火葬を実施し始めた。土葬時期と比べると、働き者の役割が形骸化し、ただ斎場に行く途中に棺を運搬することを手伝うのみになった。喪家は斎場と葬儀屋と相談した後、予算によって葬式の段取りを決め、葬式を行うようになった。通夜と火葬は斎場で行われ、斎場でお参りに来た集落住民や親戚を短時間に接待する。

・共同墓地管理の規範化—下本郷の第一共同墓地を事例として

阿見町では昭和58(1983)年から共同墓地は各集落によって管理されたが、実際に共同墓地の管理者がいないというのは現状である。また、埋葬土地が足りないため、第一共同墓地での墓地面積の区分けと第二共同墓地の建設が行われた。平成時代になると、下本郷は少子化の影響を受け、死後祭祀が主要な問題になった。さらに、地震による墓石が倒れ、修理する管理者がいない状況も住民に危機意識を持たせた。

以上の状況により、平成25(2013)年に「下本郷第一共同墓地管理規約・規定」(以下は規約)が作られ、第一共同墓地組合(以下は組合)が成立された。規約には墓地区画の使用、各家の墓地の環境状況と墓地の新設・改設の面から規定され、家の継承者がいないなどの状況を考え、無縁墓地を設置した。さらに、新宗教を信じる家、多様な葬儀を行いたい家の出現や将来起こる可能性のある災害の防止のために、組合は共同墓地に埋葬できる死者の範囲や死後の墓地祭祀といった面で調整している。

・祖先の居場所としての墓

墓地は祖先の永眠の場所⁴であるため、集落全体だけでなく、各家も墓地の清潔を保つために努力している。また、黒色に限りでなく、緑色の墓石も出る、墓石に祖先の好きな言葉や物を刻むなどのことも行われた。

→第1章の成果

土葬から火葬に変化したことにより、葬式は互助と交際である場から商品的な性質が顕著になった。この過程において、土葬時期に死者が他界へ行く過程を示す象徴的な儀礼が形骸化し、霊に対する忌避意識も徐々になくなった。

また、墓地への関心が高まり、死者(祖先)との連帯感と絆がより重視されている。異なる墓地景観を作ることから、墓地は死者の個性を示す空間だけでなく、生者(子孫)の美意識を表出する空間でもある。

【第2章の概要：仏壇の空間配置と身体体験】

・新盆でない家の盆行事

⁴ 2020年9月2日に下本郷でS氏への聞き取りでS氏の語りである。

盆になると、F家では仏壇にある位牌を全部取り出し、仏壇の前に設えた祭壇に置く。位牌の右下に施餓鬼会で供養された小さい塔婆を立てる。この塔婆は茄子にさしている。この行為の意味は不明であるが、F氏の祖母がこのようにしていたので、F氏はそのまま継承してきた。供物の内容は決まっていないが、基本的にはお膳、季節的な栽培物と祖先が好きなものである。祭壇の最前端には茄子で作られた牛と胡瓜で作られた馬がある。この祭壇の前にもう1つの祭壇があり、その上に祭祀用具が置かれる。盆の間には仏壇の隣に先祖代々の名前と戒名が書かれた掛け軸をかける。その前に季節的な作物を供え、豊作を祈願する。また、石墓が建てられた以前、祭壇の左下と掛け軸の左下に無縁仏を祭祀する供物があったが、現在F家は無縁仏を祀っていない。

祖先迎えは8月13日夕方である。墓地の建て直しの前に竹と真菰で作られた小さい盆棚（高さは約20センチ、正面には階段がある）を作って墓前に供えていた。石墓が変わった後、カラスに墓地を汚したくないと石墓に視覚的に合わないという理由で作らなくなった。送りは15日の夕方である。祖先を送る時、F氏は味のない

「団子弁当」（数量が奇数、9個と11個が一般）を供物として墓前に供える。これは祖先があゝの世に帰る途中にお腹が空いた時のための供物である。

・新盆である家の盆行事

新盆であるK家は蔵福寺（真言宗）に従って新盆儀礼を行なった。K家は8月1日から盆棚を飾り始め、8月13日になると、供花と供物を供える。盆棚には3段にわけ、供物、位牌、遺影と新仏が生前に力を入れた作業の結果が書かれた通知書などが置かれた。盆棚の後ろに無縁仏を祭祀する掛け軸をかけた。盆棚のほか、お参りに来る集落の人のために縁側に簡易的な祭壇が設置された。

祖先迎えは8月13日の夕方であり、送りは16日の夕方である。F家は墓地まで迎えたのに対して、K家は家近くの三叉路で迎えた。祖先を家に入った前に縁側で用意された水で足を洗わせる。

・祖先祭祀を持続する動機

事例①：F氏の語り※（）内は発表者註

「母親が早く亡くなったんだが、ばあちゃんがやっているの、私は全部やっている。ばあちゃんの影響を受けている。自分がある（神仏祭祀）をしないと、生きどころがない。」

「私がやらなくなったら、きっと誰もやってくれる人がいないと思うけど。」

「今年（2020年）8月15日、うちの子は交通事故に遭った。オートバイに乗った男、うちの子の車にぶつかった。うちの子は何もない、ちょっとびっくりしただけで、向こうは骨折した。病院から帰った後、ホトケ様にこのことを話して、『守って

くれてありがとうございます』って伝えた。」

以上の語りから、F氏は祖母から神仏祭祀の慣習を継承し、神仏を祭祀することで内心の信念を維持しているということを知ることができる。この信念はF氏の人生を支える力でもある。また、主観的な理由だけでなく、F氏が祭祀を行わないと、家における祭祀者がいないという可能性があるため、F氏も祭祀しなければならない。さらに、F氏は祖先が常に家族を見守っていると信じており、祖先に絶えず守ってもらうために、交換手段の一種として、毎日に祭祀する必要がある。

事例②：N氏の語り

「前はね、ご飯、水、お茶、気まぐれにあげた。ある時、私の奥さんは夢の中で、私のおじいちゃん、おばあちゃんどちらかが忘れたんだけど、何か出てきたんだって。お茶を大体普通は8分目ぐらい注ぐんでしょ。そしたら、お茶をいっぱいにしてくれ、もっといっぱい注いでくれって言われたんだって。それはね、私のおじいちゃんはやっぱりお酒を飲みたいって言うてる。私の奥さんは私のおじいちゃんとおばあちゃんと会ったことがないので、結婚前に死んでいますから。それに夢に出てきて、それを言われたの。」

「…私はそういう霊的なものに関しては、すごく信じている部分があって、で、そういう方に霊的なものを見てもらうってということだから、見てもらいに行ったんだけど。そこでやっぱり、『ご先祖様を大事にしてください』って話をされたの。それで『ご先祖様を敬いなさい。大事にしてください』っていう話で。私はご先祖様の方を大事にしなくちゃって思って、それでそれから、お酒をあげるようにしたり、位牌を作ったりとか、そういうことをやったの。」

「…嫌なことがあっても、どうしよう、これでどうしたらいいだろうって思っている時に、最後の最後はなんとかなっちゃった。あ、なんとかなってよかったってなっているから、それは『守ってもらえるから』って勝手に思ってるけどね。」

F氏の場合と異なり、N氏は祖先祭祀に不適正な態度を取っていたため、夢の形式で祖先の不満が示されたことを契機として、その態度が変わった。祖先は血縁関係のある家族であるにもかかわらず、適切な態度を持たないと、彼らは何種の形式で子孫にその不満や怒りを示すこともある。また、F氏と同じく、祖先に絶えず守ってもらうために、日々の祭祀を行わなければならない。

→第2章の成果

新盆に対する扱い方が異なる点から、新盆とは新仏が仏の段階に入るかどうかということに関わる重要な節目である。そのため、新盆である家は盛大に祭祀する。

それに対して、死者の霊がすでに安定したため、新盆でない家は大きい規模で祭祀する必要がない。祖先に敬意を示すために、日常生活における祭祀の持続が最も重要である。このように新盆でない家の場合、盆は日常祭祀の延長と位置付けられる。

日常生活において、主要祭祀者の祭祀動機や祭祀動作などから、祖先祭祀を持続する感情的な要素が捉えられる。すなわち、祖先に対する感情は追慕愛着だけでなく、祖先に家を見守ってもらうために祖先と互惠を達成するという祭祀者自身の利益需要もある。さらに、祖先の不満を招くことを恐怖する要素も含まれる。

【第3章の概要：儀礼の実践とその変化】

・島津集落の盆綱

参加者：小学4年生、5年生と6年生で男女を含めた8人（儀礼の実行者）、中学生3人（サポーター役）、男性の大人2人（行列のリーダー、儀礼の指導者）

行事概要：

- ①綱作り：8月4日（2019年のみ）7時半、参加者の父たちは龍の形にする意識を持ちながら、藁で綱を作る。完成された綱は13日まで長泰寺に置く（共同墓地が長泰寺にあり、祖先を綱に乗せるため）。
- ②祖先送り：8月13日15時、集落センターに集まり、綱を取った後、各家を回って祖先を送る。祖先を各家に送るには、庭で綱を持つ子供がしゃがみ、ほかの子どもは「やんせー、こんせー」と繰り返し唱えながら、その子を中心に左に3回回る。次に、綱を高くして「おー」と唱え、これで祖先を綱からおろしたという。最後、綱の頭部を縁側に軽くあたりながら、「仏様をお連れしました」と唱える。これで祖先をその家に送ったという。祖先を送迎する子どもたちに感謝するために、「お小遣い」⁵をあげる。金額の決まりはないが、新盆でない家が1000円で、新盆である家が3000円ということは一般的である。また、新盆である家は一般的に休憩する場所を提供し、お菓子や飲み物を用意して子どもを接待する。
- ③祖先迎え：8月15日15時、集落センターに集まり、綱を取りに行く。順序は13日と反対である。綱は共同墓地の奥に置き、自然消滅で処理する。

・盆綱の廃止と住民の思い—実穀集落を事例として

参加者の不足により、実穀では平成14（2002）年から参加可能な年齢や性別制限を緩めるなど⁶の措置を実施した。行事を円滑に行うために、平成29（2017）年に盆綱運営委員会（以下は委員会）⁷が成立された。しかし、参加者がますます不足する、当時の参加者や住民が盆綱に抵抗的な態度を示したなどの状況により、委員会

⁵ 各集落の呼び方が違うため、ここで島津における呼び方を採用する。

⁶ 各集落では参加者の年齢範囲が違う。実穀の場合、従来では中学1～3年生しか参加できなかった。また、従来では男の子しか参加できなかったため、盆綱は男の子の行事とも思われる。

⁷ 盆綱運営委員会は保存会ではない。委員会のメンバーは、過去盆綱に参加したことのある、盆綱の内容に詳しくて経験することのあるまたは行事自身に関係する6人から構成した。委員会は藁の収集や購入、行事の進行、日程や路線などの決定といった面で活動していた。

は令和元（2019）年に集落内で盆綱行事の継続についてアンケート調査を実施し、その結果、実穀の盆綱が廃止された。

伝統行事であり、伝統行事をもって「敬う心」を養う⁸ために、継続を望む住民は当然いる。しかし、子どもへの身体的かつ心理的な負担、葬儀の変化、盆綱の由来や継続する意味の不明、集落への帰属意識が衰退することで集落行事への漠然などの理由で過半数の住民は反対した。

・儀礼秩序の形成と盆綱の性格の変化

盆綱の進行という過程において、同様な服装、動作や言語などの措置で統合されることで、子どもは独特な儀礼秩序を形成し、日常の俗たる身分を脱離し聖なる身分に変換した。儀礼秩序にあるため、不適宜によって秩序を破壊することは行っていない。そのため、盆綱は実際に荘厳な行事であったと位置付けられる。

しかし、少子化による参加者の不足などによる各種の措置が実施されるため、低学年の子どもや女の子が参加することを配慮し、頻繁な休憩などのことで儀礼秩序を破壊することがある。子どもは盆綱の意味を深く考えておらず、ただ儀礼実践を「楽しんでいる」⁹。このように盆綱は荘厳であった行事から遊びになったと位置付けられる。

→第3章の成果

集落の維持程度が高かった時期に、死者は家における死者集団に所属しながら、集落における死者集団にも所属していた。したがって、各集落では共同行事である盆綱で祖先を送迎するようにしていた。しかし、参加者の不足が続々と廃止された理由の1つであるが、集落に対する帰属意識の衰退も捉えられる。これは死者だけでなく、盆綱で祖先を送迎することを望まない家、異なる宗教を信じる家や引っ越してきた家などの出現から、生者が集落に対する帰属意識も衰退していると考えられる。生者にしても、死者にしても、より家の枠組みに納まった。

一方、盆綱をなお行っている集落において、共同で祖先を送迎することで「祖先」と「子孫」との身分と関係を再確認し、生者集団（参加者）は団結性を強め、祖先に対する感情も強化した。

【第4章の概要：祖先祭祀の構築と展開】

・祖先と祖先祭祀に関する認識

祖先観の全体像、祖先祭祀に対する意識の傾向を把握するために、埜と島津で¹⁰アンケート調査を実施した。以下はアンケート調査の結果による分析である。

⁸ 2019年12月に委員会がアンケート調査を実施した結果による住民の回答である。

⁹ 2020年6月5日に島津のN氏への聞き取りでN氏の語りである。

¹⁰ 埜では盆綱が廃止されたに対して、島津ではなお行われている。このように集落共同行事の維持程度によって家・集落に対する帰属意識が異なるため、この2つの集落でアンケートを実施した。アンケートの実施時間は2020年9月であり、第4章の分析は全部アンケート調査の結果に基づくものである。

まず、祖先とは墓を住居とし、他界にいるもしくは子孫の極身近な場所において子孫を見守っている、亡くなった家族全員である。また、日常生活には「ホトケ様」と「ご先祖様」を混在して呼んでいるが、血縁関係の親疎、死後時間の長短（死者の形態）と仏教による影響という3つの面から区別された人がある（表）。

判断要素	関係と区別
血縁関係	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「ホトケ様」と「ご先祖様」の構成員は同じであり、その家に所属する者である。 ○ 家を作った最初の人物が「ご先祖様」であるのに対して、関係の近い家族成員（肉親）が「ホトケ様」である。
死後時間 (死者の形態)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 構成員は同じく、その家に所属する者である。 ○ 「ホトケ様」と「ご先祖様」とは死者の2種の形態であり、「ホトケ様」とは「ご先祖様」の前段階である。両者は「祖先」に含まれる。 ○ 「ホトケ様」が「ご先祖様」へ転換するのは子孫の感情と記憶によるものである。祭祀者は死者を記憶して強烈な感情を持つ時期に、死者を「ホトケ様」と呼んでいる。死者に対する感情と記憶が薄くなった時（感情と記憶はほぼない状態）、「ホトケ様」は「ご先祖様」へ転換する。
仏教の影響	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「ホトケ様」と「ご先祖様」とは従属関係であり、「ご先祖様」は「ホトケ様」によって救済される。両者とも仏壇で祀られている。 ○ 「ホトケ様」とは仏壇で祀られた本尊であり、「ご先祖様」とは各位牌の主、つまりその家に所属する全ての死者である。

表 「ホトケ様」と「ご先祖様」の関係と区別

さらに、それぞれが存在する空間の重なる程度によって祖先と子孫との関係は2種に分けられる。1つは、祖先は子孫が存在する空間に容易に来られないという状態である（図1）。この場合、日常的に祖先は固定的な空間（墓など）におり、子孫と空間的かつ時間的な境界によって隔てられる。日常的には子孫と直接的に接触できないが、特定の時期（彼岸、盆など）になると、両者は直接に接触できる。これらの時期のみで両者が存在する空間は重なる。これに対して、祖先は日常生活で子孫の極身近な場所にいる状態である（図2）。この場合、両者の間には空間的かつ時間的な境界がせず、存在する空間は完全にあるいは大部分に重なる。子孫は常にこの状態の祖先を最も親しんで信頼できる対象とし、祖先との連帯感がより深い。

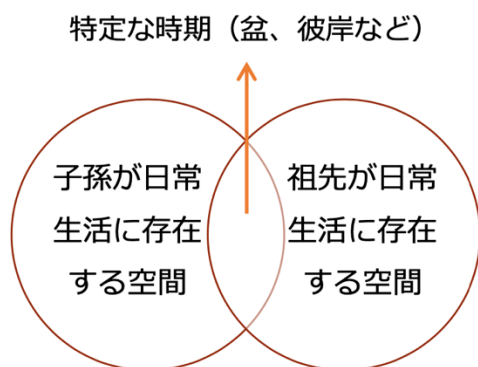


図 1

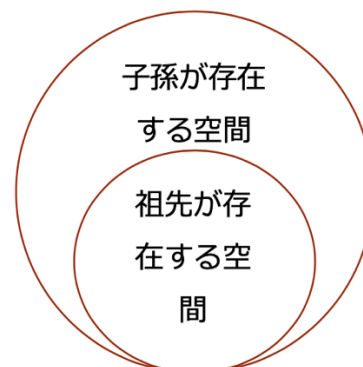


図 2

・儀礼の模倣と祖先祭祀の伝承

アンケートを回答した過半数の人が家族の行為や言語を模倣することで無意識的に祖先祭祀の儀礼を把握したに対して、極少ない人が寺院から有意識的に習得した。伝承手段は違うかもしれないが、彼らの子どもに日常生活からあるいは盆や彼岸の時期に、祖先を祀ってもらうようにしている。つまり、現在の祭祀者は上の世代から祭祀儀礼を模倣して持続し、今度は身分を転換して下の世代に彼らの所作や言語を模倣してもらい、継承させる。このように祖先祭祀は代々伝承し続ける。

しかし、儀礼を模倣して全部変えずに継承することではない。被伝承者は利益需要と感情による価値観と自身状況による基準を通して、彼らにとって適切な儀礼（あるいは仕方）を選択して継承する。そして継承してきた儀礼は常に被伝承者の意志によって変化している。また、儀礼行為の意味を知らず、被伝承者は独自の感覚と理解を加え、合理的な解釈を付与することがある。このように形成された祭祀行為は安定的、持続するのが容易であるという特徴がある。以上から祖先祭祀の儀礼伝承は再選択的、可変的かつ再解釈的な過程であると考えられる。

【結論】

現在、家において、新仏の形態によって盆の祭祀儀礼と祭祀規模を区別し、無縁仏に対する観念も異なる。新盆でない家では盆は日常的祭祀の延長に位置付ける。そして、新盆でない家は無縁仏に対する観念は墓地の建て直しと共に徐々に消えていき、祭祀している主体は自分の家の祖先のみと考えるようになった。また、祭祀者は33年や50年という時間に拘らず、死者に対する記憶と感情が徐々に主要な決定要素になった。死者に対する記憶と感情は祭祀者が祭祀を持続する感情的基礎の1種ともなる。毎日仏壇で祖先と交流し、家を見守ることを望むという祭祀者と家族や子孫を守ることを望むという祖先は互惠を達成し、家の永続を努力している。

一方、集落を単位として行われた盆綱行事において、子どもを順調に成長するこ

とを望む¹¹という祖先と祖先を追慕するという子どもとの相互の感情に基づき、子どもは儀礼秩序を形成することで祖先を送迎する身分となり、あの世と接触し2つの世界を連結する。日常生活に従属の地位にある子どもは祖先送迎の儀礼の主導者と逆転した。この逆転的な秩序は短時間的なものであり、盆綱が終わると、子どもは共食により再び日常的な身分に復帰する。過去の盆綱は男の子の行事とも呼ばわれ、行事の進行及び伝承は全部子どもによって行われ、行事の主導者であったとも位置付けられる。盆綱の実行により、集落に所属する祖先集団を強固するだけでなく、子どもの団結統一の精神も強化する機能もあった。しかし平成時代に転換する時期に、少子化の影響や集落に対する帰属意識の衰退で盆綱を実行する集落は徐々に少なくなり、盆綱を維持し伝承するために、大人の介入が必要となった。このように子どもは徐々に行事の主導者から儀礼の主導者となり、儀礼最中以外には周縁化された。また、盆綱の廃止により、集落に所属する生者集団だけでなく、死者（祖先）集団もより家に納まってきたと捉えられる。

¹¹ これは2019年7月25日に飯倉のM氏への聞き取りでM氏の語りによるものである。

【本発表の参考文献】

- 阿見町史編さん委員会 1983 『阿見町史』
- 有賀喜左衛門 1970 「日本における先祖の概念—家の系譜と家の本末の系譜と—」 『有賀喜左衛門著作集9』 未来社
- 岩野笙子 2008 「粟島の萱舟作り」 『高志路』368
- ウィクター・W・ターナー著 富倉光雄訳 1976 『儀礼の過程』 東京思索社
- 上杉妙子 2001 『位牌分け：長野県佐久地方における祖先祭祀の変動』 第一書房
- 小野重朗 1984 「正月と盆」 宮田登 『暦と祭事—日本人の季節感覚—』 日本民俗文化大系第9巻 小学館
- 喜多村理子 1985 「盆に迎える霊についての再検討—先祖を祀る場所を通して—」 『日本民俗学』157・158
- 櫻井龍彦 2012 「盆綱攷」 『国際開発研究フォーラム』42
- 佐々木宏幹 「仏」 福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司・神田より子・中込睦子・渡邊欣雄 2000 『日本民俗大辞典 下』 吉川弘文館
- 鈴木岩弓 2018 「死者のゆくえ」 鈴木岩弓・森謙二編 『現代日本の葬送と墓制 イエ亡き時代の死者のゆくえ』 吉川弘文館
- 高谷重夫 1985 「餓鬼の棚」 『日本民俗学』157・158
- 竹田聰洲 1996 『日本人の「家」と宗教』 国書刊行会
- 坪井洋文 1970 「日本人の生死観」 『民族学からみた日本 岡正雄教授古稀記念論文集』 河出書房
- 湯紹玲 2013 「ムラの盆行事とイエの盆行事の再構成—三重県志摩地方の事例から—」 『京都民俗学会会誌』30・31
- 湯紹玲 2015 「精霊船というモノの祭祀主体の変化からみるムラ・イエの盆行事—福井県若狭地方の事例から—」 『京都民俗学会会誌』33
- ピエール・ブルデュー、ロイック・J・D・ヴァカン著 水島和則訳 2007 『リフレクシヴ・ソシオロジーへの招待：ブルデュー、社会学を語る』 藤原書店
- 平山和彦 1992 『伝承と慣習の論理』 吉川弘文館
- ファン・ヘネップ著 綾部恒雄、綾部裕子訳 2012 『通過儀礼』 岩波書店
- 福田アジオ 1993 「伝承地域と民俗の地域差—一年中行事の東西日本対比—」 『国立歴史民俗博物館研究報告』52
- 中込睦子 「先祖」 福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司・神田より子・中込睦子・渡邊欣雄 1999 『日本民俗大辞典 上』 吉川弘文館
- 中込睦子 2005 『位牌祭祀と祖先観』 吉川弘文館
- 藤井正雄 1988 「無縁仏考」 大島建彦編 『無縁仏』 岩崎美術社
- 藤田稔 1964 「茨城の盆綱」 『茨城の民俗』3
- 穂積重遠 1929 『穂積陳重・穂積八束進講録』 岩波書店
- 前田卓 1965 『祖先崇拜の研究』 青山書院
- 最上孝敬 1988 「盆の祭り」 大島建彦編 『無縁仏』 岩崎美術社

- 森岡清美 1984 『家の変貌と先祖の祭』 日本基督教団出版局
- 森謙二 2018 「「イエ亡き」時代の墓地埋葬の再構築のために 「埋葬義務」との関連で」
鈴木岩弓・森謙二編 『現代日本の葬送と墓制 イエ亡き時代の死者のゆくえ』 吉川弘
文館
- 柳田国男 1946 『先祖の話』 筑摩書房
- 山田慎也 2006 「近代における遺影の成立と死者表象－岩手県宮守村長泉寺の絵額・遺影
奉納を通して－」 『国立歴史民俗博物館研究報告』132
- 山田慎也 2011 「遺影と死者の人格 葬儀写真集における肖像写真の扱いを通して」 『国
立歴史民俗博物館研究報告』169
- ヨルン・ボクホベン 2005 『葬儀と仏壇－先祖祭祀の民俗学的研究－』 岩田書院
- ロバート・J・スミス著 前田隆訳 1996 『現代日本の祖先崇拜－文化人類学からのアプロ
ーチ』 御茶の水書房

集落	実施状況	廃止時間	送り	迎え	情報源
埴	×	2016年	○	×	聞き取り
掛馬	○	×	○	○	聞き取り
上本郷	×	2008年前後	○	×	聞き取り
下本郷	×	2014年	○	×	聞き取り
飯倉	○	×	○	×	聞き取り
実穀	×	2020年	○	○	聞き取り
石川	×	2006年	○	×	聞き取り
上小池	×	2009年前後	○	○	聞き取り
下小池	○	×	○	×	聞き取り
島津	○	×	○	○	聞き取り
岡崎	×	不明	○	×	『阿見の民俗』
若栗	×	不明	○	×	『阿見の民俗』

資料 2020年11月現在、阿見町における盆綱実施状況

聞き取りと『阿見の民俗』により発表者作成

【修士論文目次】

- 序章
- 第1節 研究背景
 - 第2節 問題の所在
 - 第1項 祖先祭祀に関する研究の展開と本論文の目的
 - 第2項 本論文の視座
 - 第3項 用語の定義
 - 第3節 研究方法と本論文の構成
 - 第1項 研究方法
 - 第2項 本論文の構成
 - 第4節 地域概要
 - 第1項 調査地概要
 - 第2項 盆綱について
 - 第3項 主要調査地の選定理由
- 第1章 葬制の変化と墓地景観の形成
- 第1節 土葬から火葬へ—F家の香奠帳から
 - 第1項 互助と付き合いの舞台
 - 第2項 自由化と商品化の告別式
 - 第3項 他界への旅
 - 第2節 墓地の統合—下本郷集落の第一共同墓地を事例として
 - 第1項 第一共同墓地組合の成立
 - 第2項 第一共同墓地管理委員会
 - 第3項 共同墓地の整備
 - 第4項 無縁墓地の管理
 - 第5項 新たな議論
 - 第3節 祖先の居場所としての墓
 - 第1項 どうなぎと墓参り
 - 第2項 カラスへの対処法
 - 第3項 個性めいた墓
- 小括
- 第2章 仏壇の空間配置と身体体験
- 第1節 神聖的な空間の構築
 - 第1項 位牌の継承
 - 第2項 仏壇の設えと美意識
 - 第3項 「空にいる」祖先
 - 第2節 区別された盆行事
 - 第1項 新盆でない家の盆行事
 - 第2項 新盆である家の盆行事
 - 第3節 祖先と共存している日常生活
 - 第1項 祖先祭祀の契機
 - 第2項 二つの世界を繋げる線香
 - 第3項 日常祭祀の場面
- 小括
- 第3章 儀礼の実践とその変化
- 第1節 消えていった無縁仏
 - 第1項 真言宗における無縁仏への解釈
 - 第2項 家から薄れていった無縁仏
 - 第3項 新盆のための施餓鬼会
 - 第2節 暴力な遊びである盆綱—島津集落の盆綱を事例として
 - 第1項 島津における盆綱の概要
 - 第2項 祖先を送迎する子ども
 - 第3項 遊びとしての盆綱
 - 第3節 儀礼の伝承と廃止—実穀集落を事例として
 - 第1項 「盆綱ノート」からみる盆綱の实行
 - 第2項 盆綱運営委員会の成立
 - 第3項 盆綱の廃止と住民の想い
- 小括
- 第4章 祖先祭祀の構築と展開
- 第1節 「祖先」への解釈
 - 第1項 魂の行方
 - 第2項 祖先になれる者
 - 第3項 祖先の二重の意味
 - 第4項 多様な性格を持つ祖先
 - 第2節 二つの世界を往来する祖先
 - 第1項 集落への帰属意識
 - 第2項 空間的と時間的な境界

第3節 慣習としての祖先祭祀

第1項 儀礼の主要実行者

第2項 儀礼の模倣と持続

第3項 祖先祭祀の意味

小括

終章

第1節 総括

第2節 現代農村における祖先祭祀の展開と
変容

第3節 今後の課題

引用文献一覧

資料編

I. F家における香奠帳

II. 「盆綱ノート」における平成16年の記録